

才能の県外流出

森本 忠

博士(アグラの救ライセンサー)田中春義氏(マンデイアの日本実験農場)などは終戦直後半歳ばかり、南日本新聞の主筆として鹿児島に在住したことがあるが、その時初めて、従来考えていた鹿児島人のイメージと実際とが、随分違ったものであることを知った。

幕末、維新にかけて、薩摩からは英雄豪傑が雲の如く輩出しているのに、鹿児島人といえはばいづれも豪放磊落、粗野で無神経な人ばかりかと思っていたら、とてもでもない見当違いだった。臆病なほどおとなしく、事大主義だった。

「よそもん」に対して敬遠しがちなのも、劣等感と自己防衛本能から来る排他心によるものであろう。

しかし一面個人崇拜、団結力がつよく、或る一人の人を押し立てて、そのの下に集結する傾向もある。私の行った時は、床次竹次郎がその代表だった。床次氏が「ひとのみち」の信者だったからか鹿児島には「ひとのみち」信者が多いのもそのせいからかもしれない。

要するに明治維新以来、これという人物はみな中央に出てしまつて、あとはからっぽになっていたのであろう。

熊本も人材の流出という点では鹿児島と似ているが、しかし理由は全く異った事情から来ているように思われる。

鹿児島では人材や才能は郷土で温く育まれて、全県民の後押しでやがて中央に

の好適例であらう。そしてより多く、より大きく日本の協力援助を待望している

必然的に進出するという形を取るが、熊本では嫉視排斥に悩まされ、地域社会の妥協的ムードに合流しないため、居辛くなって逃げ出すというケースが多い。

私は東京にずっと長くいて、その間同郷の人に会う機会も大いにあったわけだが熊本だから特別どうだという感じを持つたことはない。同郷のよしみなど、そう痛切なものではなかったようだ。

こんど熊本に来るについても、私はかなり二の足を踏んだが、私同様、東京で活躍している熊本人たちは、熊本を懐しがりはするが、熊本に帰って住みたいとは思わぬ人は、不思議なほど少なかった。

或る出版社の編集長をしている私の友人は、「まだおれは君みたいに熊本に帰って住むほど老い込んだじやないつもりだ」と皮肉ったほどである。

これはどういうわけだろうか。徳富蘇峰翁が満九十歳になられて、最後の帰省をせられた時、私はまだ四万池の被災住宅にひっこんで、食うや食わずの生活に喘いでいた。すると熊目の小崎邦彌君からの使いが来て、徳富先生があなたにお会いしたいと言っておられる、と言つて来た。

洗馬の研屋にお伺いすると、先生は歓迎して下さり、お互い追放中の苦労話や終戦前後の打開け話をせられた。そのあ

のがアジアの本当の姿ではなからうかと私は痛感した。(国立阿蘇青年の家所長)

と、「あなたも追放が解けたのですからもうそろそろ東京にお出になつてはいかがですか。このままでは腐つてしまひますよ」と言われた。そして、「熊本の人達はそりや一人々々は一角の人物ばかりです。だがこれを例えて申しますれば、丁度りんご箱の中に入りんごをぎゆうぎゆう押し詰めるようなもので、りんご同士がこすり合い、傷つけ合つて、お互いに腐つてしまふ結果になるのです」

これは先生一流の好話だったが、確かに真実の一面を衝いていた。私が追放にかかつて一切の社会的活動を禁圧されていたればこそ郷里での風当りも厳しくなかつたのであろう。

私は再び熊本に帰つて来た。私としては私の小さな創造の仕事を、単に東京から熊本に移すのだと思ひたかつた。久しぶりに接する熊本は、昔同様視野の狭さ、また暗黙の裡に人を傷け、人の足をひっぱることは行われているようだが、それより目立つのは各方面での太平ムードで、それは結構だが安易な妥協と押れ合いの表彰ごっこや同じ顔ぶれでの祝賀パーティーの流行で、モッコスなどは木の葉猿みたいな観光土産品となり下つた事だ。(作家)

この日頃

河瀬 澄

年をとる程、一年の短かさがいよいよ急になると前から聞いていたけれど自分がその年をとった年令になってみるとよく判らない。

私には子供が二人いて、上は娘で、これが又特別健全型娘なので何の心配もした事がない。高校も親元を離れて一人で



新春の天草 坂本善三 (独立美術)

自炊していたし、目下浪人中であっても至極楽天的に一人暮らしをしている。もう一人の子供が男の子で、これがどうにも私の手に負えない息子になってしまった。

家の中では大いばりで、私の事など全然眼中になし、父親は少し存在意義を認めている程度、まるで自分一人のために家中が窮々として奉仕してくれればい

いぐらに考えている。とにかくもう腹にすえかねるような事ばかりなので、あまりえらそうにいわれた時は、私は物陰へ行つて少し涙を流してようやく胸をな

でおろしたり、何か買物を考え出してしばらく外を歩いて来たりして我慢をする。どうして怒らないんですか、お父さん

はそんな時黙つてられるのですか、と他所の方がおっしゃると、私は恥かしく

てたまらないのでひたすら「私が甘く育て過ぎたものですから。」と謝つてばかり

いる。主人は、家の中に怒り声や喧嘩声のあるのは嫌だと昔からいので、大抵の事を私達はお互に、まあいいわまあいいわで通して来た。これが子供を甘くした遠因の一つでもあらうと思ふけれど、事が起きてからその原因は等といつても、それは遠く遠く小さな事が次々と色んな形を持って、色々に変化して来たものだろうから、そう簡単なものじゃないと思ふ。

夫婦喧嘩の絶え間ないと言う場合合つて、ご亭主が浮気して困るといふのだつて、みんなそんな事ではないのかしら。

何か困つた事が起こる度、私達夫婦は必ず交通事故だと思つたよ、とあつさり諦める事になっている。だから私達は今この近年だけでも大分足が片方失くしたり手がもげたりした事になっている。

先日息子があまりいう事を聞かなくて反抗態度が強いたので、私はもうこの先いかなる事かと気も転倒した事があつた。誰に相談したつてどう仕様もないと知つているから、主人とも話し合はず、唯もうどうしていいかと気もそぞろになつていただけだつた。そして思い余つてテニスコートでの知合いというだけなのに、厚かましくも神父様にお願ひした。

「お祈りする事を教えて下さい、ませんか。」そうしたら神父様はビシヤリとお答えになった。「宗教とはそんなものではないですね。」それでも思い余つた顔をして

「お祈りする事を教えて下さい、ませんか。」そうしたら神父様はビシヤリとお答えになった。「宗教とはそんなものではないですね。」それでも思い余つた顔をして

「お祈りする事を教えて下さい、ませんか。」そうしたら神父様はビシヤリとお答えになった。「宗教とはそんなものではないですね。」それでも思い余つた顔をして